

エジプト・マルカタ王宮「王の寝室」の天井画

The Ceiling Painting of the Palace
at Malqata, Egypt西本真一^{*}
NISHIMOTO Shin-ichi

ABSTRACT A heavily ruined palace-city founded by Amenhotep III is preserved at Malqata on the West bank of Thebes, Egypt. It consists of various structures in the desert; several residential palaces, a temple of Amen, a festival hall, houses and apartments for attendants, and a desert altar "Kom al-Samak", all of which were constructed by mud bricks with gaily decorative paintings on walls and ceilings. Since 1985 this area has become a concession of the Waseda University Mission, and re-excavation works have been carried out at the several rooms in the main palace. The innermost room of the main palace is the king's bedchamber, from where numerous fragments of the paintings on ceiling have been recovered. One of the most remarkable motifs is a succession of great vultures representing the Goddess Nekhbet outspreading the wings as reported by the Metropolitan Museum of Art, the former excavator, under each of which the names and titles of Amenhotep III are depicted. The succession of vultures is surrounded by geometrical patterns such as rosette and checker patterns.

The first attempt to reconstruct the whole ceiling painting was carried out in 1988, and a detailed study through the record work of each fragment with assembling trials since 1989 has revealed the fact that the images of Nekhbet had been 8, not 7 as supposed in the earlier stage of reconstruction. All the 9 lines of inscriptions are also reconstructed with considering the each find spot on the floor. In the King's bedchamber, the floor of the innermost part is raised where the king's bed had been placed. It was come to light that the ceiling of this upper level is drawn more elaborate than that of the lower level; The inscriptions is slightly longer, and the color of the center circle of rosette pattern is also changed from red to green.

The fragments of the northernmost ceiling suggest that the ceiling of this part would have been slightly curved down toward the north wall, and this reminds us a roof shape of pr-wr, a traditional shrine of the Upper Egypt, with a roof sloping down from the front. At the lower part of the walls the paneled pattern and a wavy

* 早稲田大学理工学部建築学科助教授

Associate Professor, Department of Architecture, Waseda University

line are depicted, but the rest of the interior decoration of this bed chamber is basically painted in glossy transparent yellow presumably imitating gold color, much similar to the shrines of Tutankhamun.

In this paper the reconstruction process is described, with some technical reports on the construction method for obtaining the vast painting area of the ceiling without projecting the large wooden beams.

I. はじめに

ルクソール（古代名テーベ）西岸の南方にはマルカタと名づけられた地があり、ここにはアメンヘテプ3世が造営した日乾煉瓦造の王宮が⁽¹⁾残存している。この遺構がダレッシィ（G. Daressy）により最初に発掘されたのは19世紀末の、ちょうどアマルナ王宮がピートリ（W. M. F. Petrie）によって初めて調査された時期にまで遡るが、その後、アメリカ人タイトゥス（R. de P. Tytus）による1900年代初頭の発掘やメトロポリタン美術館による長期にわたる組織的な調査⁽²⁾、さらには1970年代のペンシルヴェニア大学博物館による広域調査⁽³⁾などを経て、1985年には早稲田大学が発掘権を獲得し、故・渡辺保忠早稲田大学理工学部教授（当時）を隊長とする調査隊が部分的な再発掘を開始した。これは同大学エジプト調査隊が先に発見した「魚の丘」遺跡⁽⁴⁾、今日においては研究者によってアメンヘテプ3世の Desert Altar と呼ばれている小建築の機能と祭祀上の重要性を、当王宮の全体配置から探ろうとした意欲的な試みである。さまざまな施設が建ち並ぶ王宮のうち、主王宮の中心部にまず調査の焦点は当てられて、大ホールやその両脇に配置されたアパートメント、ならびに王の寝室といった一連の重要な部屋が精査され、各室からはいずれも夥しい量の彩画片が出土したが、それらはかつてこの王宮の壁面や天井に描かれて豪華な装いを見せていたはずの装飾画の断片である。モチーフの復元は再発掘調査の直後から進められ、各室の天井画の概要を記した当王宮の調査報告書は1993年に刊行されている⁽⁵⁾。その後も往時の装飾画を復元するための彩画片の記録と接合作業は早稲田大学人間科学部教授・吉村作治を隊長とする早稲田大学エジプト学研究所に引き継がれて今なおおこなわれており、本稿では王の寝室の天井画復元に関する進捗状況の報告と、その後、新たに明らかとなった諸点について扱うこととしたい。

本稿で取り上げようとする王の寝室は、ほぼ天井全面にわたる装飾画の復元が可能である点で、とりわけ注目される貴重な部屋である。古代エジプトの王宮建築の中で王の寝室が見つかる例はきわめて稀であり、マルカタ王宮を除くならば、王の寝室のための華麗な装飾が今日まで伝えられている遺跡は皆無であるといって過言ではない。広く他地域の古代王宮建築を見渡してもこうした例は他になく、ここでは建築構法と関わる諸点に触れながら天井画全体の復元に関して概略を述べる。

II. 天井画片と壁画片の類別

王の寝室を含む主王宮全体は日乾煉瓦で造られており、石材は柱礎石、戸口の敷居といた部分にのみ限定されて用いられた。煉瓦で壁を立ち上げた後に木製の梁を渡し、天井を架けている。床・壁・天井には仕上げ塗の泥 plaster を塗って、この上に直接、彩色がおこなわれた。

王の寝室からは泥片がおよそ2000点ほど出土したが、これらの大多数は平滑な面を有し、そこにはやはり彩画が施されていた。平坦な彩色面は指の跡も残さず滑らかで、人間の手によって仕上げられたとは思われない。道具を用いて泥 plaster を塗り上げたのであろう。特に広い天井面に泥 plaster を塗り上げる作業の際には常時見上げる姿勢を取らざるを得ず、これには多大な苦痛を伴ったであろうから、木製のコテなどを使用して効率的に作業を進めたと考えるのが妥当である。壁面に関しても同様な方法で仕上げられたと思われる。

残存する天井下地痕や煉瓦痕から、天井画片と壁画片との類別は容易であった。また天井画片と壁画片とでは泥質もわずかに異なり、壁画片の方が硬質である印象を受ける。裏側に明瞭な痕跡を残さない場合にはこの泥質の差異の他に、何よりも厚さがほぼ2cmに均一となった形状と、描かれたモチーフによって壁画片を見分けることができた。天井画の断片の裏側にはきわめて特徴的な圧痕が認められるものが多く、植物を束ねたものをさらに隙間なく並べて作った天井下地材の様相が明瞭に伝えられている(図1, 下; 図2, 左下)。出土した彩画片はほとんどが天井画片に属し、壁画片と判断されたものは数十片に過ぎない。タイトゥスはこの遺構における主要構造材の白蟻による甚大な被害について述べているが、これはわずかに出土した蝕害の痕跡を残す木片などによって日本隊の再発掘調査でも確認された。この部屋の天井が崩落したのは、人為的な破壊に寄ってではなく、白蟻によって柱や梁などが大きな損傷を受けたためであろう。天井画片に比べ、壁画片がほとんど失われて残っていないのは、後代に再利用のため煉瓦が持ち去られたためと考えられる。

III. 天井画のモチーフ (図1, 2)

(1) 概要

天井彩画片は黄色地にヒエログリフの文字列を記したもので、同じく黄色地に両翼を拡げたネクベト画像、そしてローゼット文、チェッカー文、色帯文といった数種類の幾何学文様に大きく分けられる。ヒエログリフで記された文字列はいくつかのヴァリエーションを持つ王名とその修飾語からなり、⁽⁹⁾ 拡げられたネクベト画像の両翼の下に大書されたものである。ネクベト画像はこの時代の王墓の通廊や記念神殿の天井によくうかが⁽¹⁰⁾

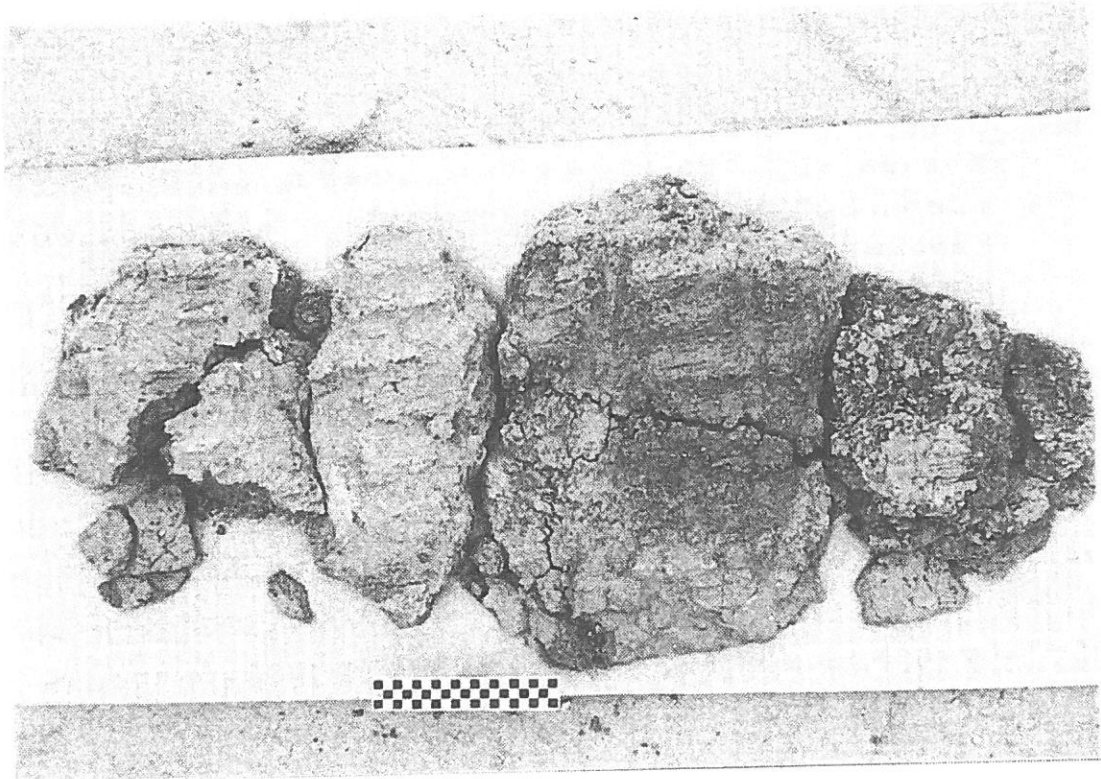
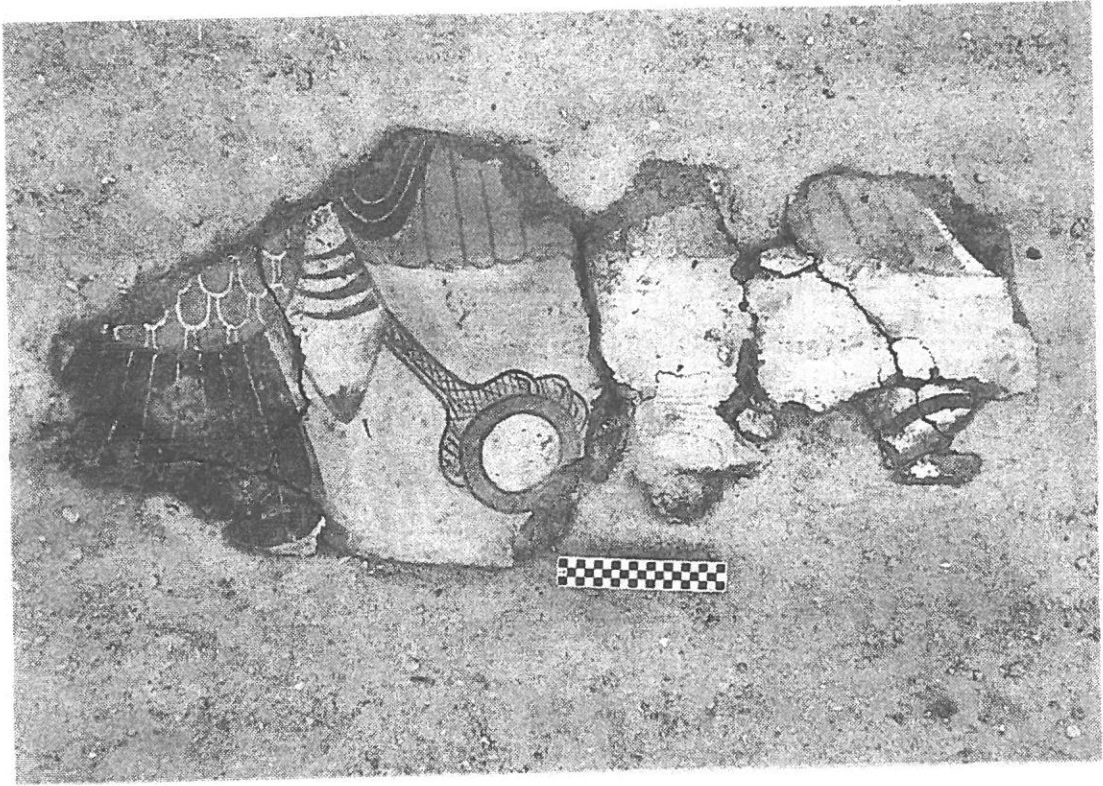


図1 上：彩画片の典型例，ネクベト胴体下部，右翼と下の聖刻文字，ntr nfr，それに続く上下エジプト王名のカルトウーシュ前端部。
 同，下：同彩画片の裏面。

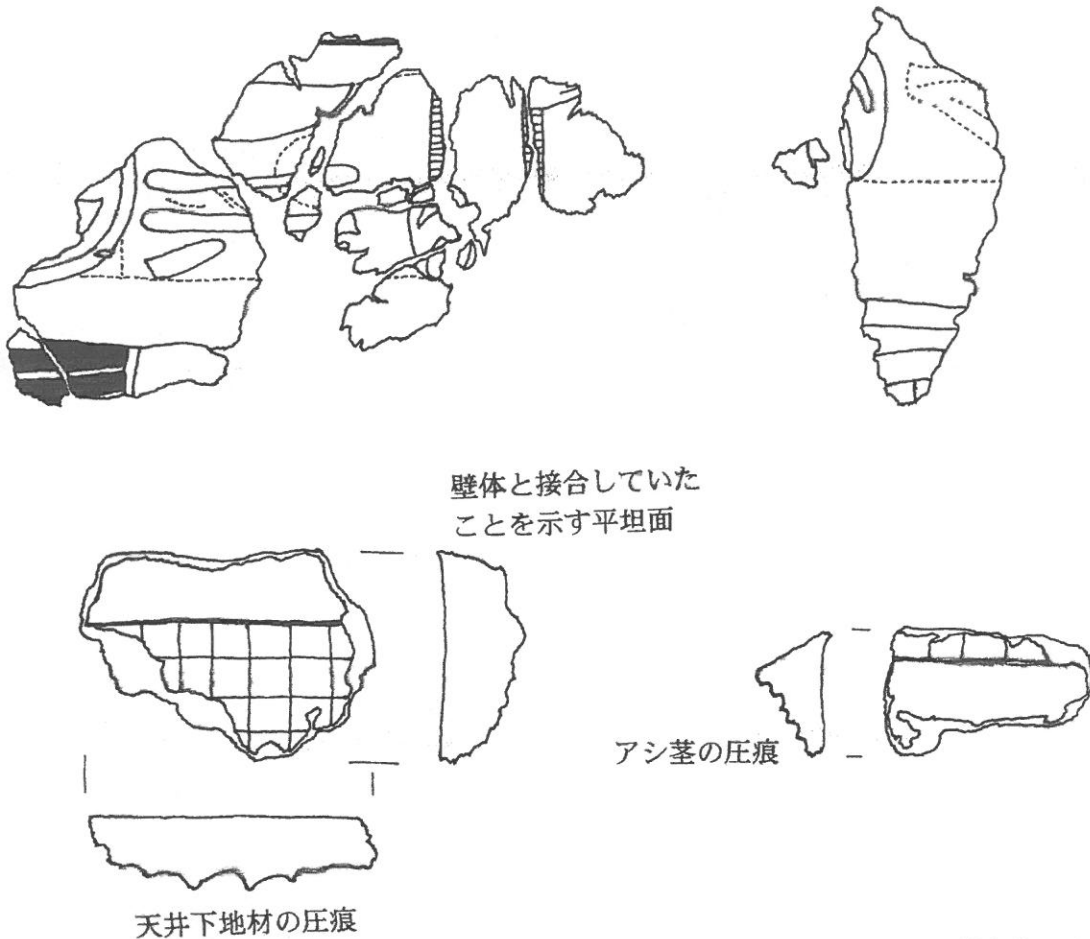


図2 出土彩画片のモチーフ。上左、ネクベト左翼上端、及びその上の聖刻文字、nfr nfr nb t3wy、上下エジプト王名のカルトゥーシュの前端部、またそれらの文字の上に水平に引かれた白帯の一部。異なった文字を書こうとした赤線による下書きを点線で示す。
 上右、ネクベト右翼と聖刻文字 nfr。異なった文字を書こうとした赤線による下書きを点線で示す。
 下左、チェッカー文とその外周に塗られた黄帯。黄帯に沿って彩画片が途切れている点に注意。また裏面には天井下地痕が残存する。
 下右、王の寝室北部から出土したチェッカー文と黄帯の断片。裏面にアシの茎の圧痕が残る

われるように、建造物の軸線に沿って幾羽も連続して描かれた王権を象徴するモチーフであった。これらの四周をローゼット文やチェッカー文などが囲う天井画全体の構成については、メトロポリタン美術館に保管されていた未刊行資料をもとに考察をおこなったスミス (W. S. Smith) ⁽¹¹⁾ によって、すでにいくらか言及されている。

日本隊の再発掘調査によって、この天井画の様相はさらにくわしく明らかにされることとなった。この部屋の再発掘をおこなった1988年当時に試みられた縮尺5分の1の天井復元は、全体の画面構成を大まかに把握するためになされたが、保存修復を勸案した

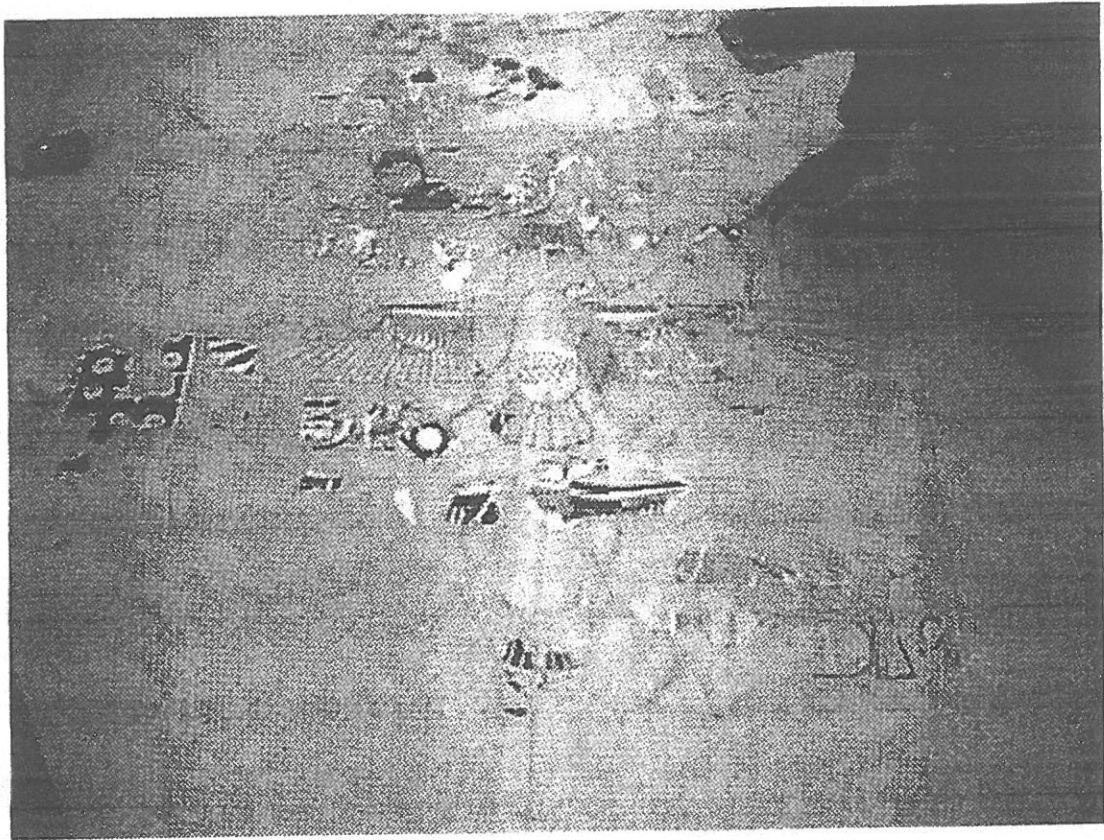


図3 縮尺3分の1による天井画の復元作業

場合には出土した各々の彩画片が天井画全体においてどこに位置していたか、正確な場所を求めなければならない。そこで縮尺を3分の1に上げ、出土位置を考慮に含めながら実際の彩画片を組み立てていく作業が現在では進められている(図3)。数年にわたる彩画片の記録と接合作業をおこなった結果、発掘当初の復元図にはいくらかの誤りがあることが判明したが、もっとも大きな訂正事項は、この部屋の天井には合計としてネクベトの数が7羽ではなく8羽あったことが示された点である(図4)。

メトロポリタン美術館には1910年代の発掘当時の写真が多数収蔵されている。筆者は1989年に同美術館を訪れ、写真資料の提供と発掘作業日誌の閲覧の許可を得たが、再発掘当時にうかがわれた折り重なった状態の彩画片は、メトロポリタン美術館収蔵の写真にうかがわれるほぼ同位置に認められ、この部屋の天井が崩落した時の状態がそのまま残されていたと判断される。おそらく先行調査隊は、床上に折り重なった彩画片を取り上げることはせず、それらを残したまま、残余の部分の堆積物を床面まで除去したと思われる。出土遺物はできる限り原位置を動かさないように努めた形跡が認められ、また彩画片の保護のために新聞紙で被い、その上から覆土が施されていた。この点は、かつて発掘調査がなされたにも関わらず、天井画の復元を進める上で、彩画片の出土位置に今

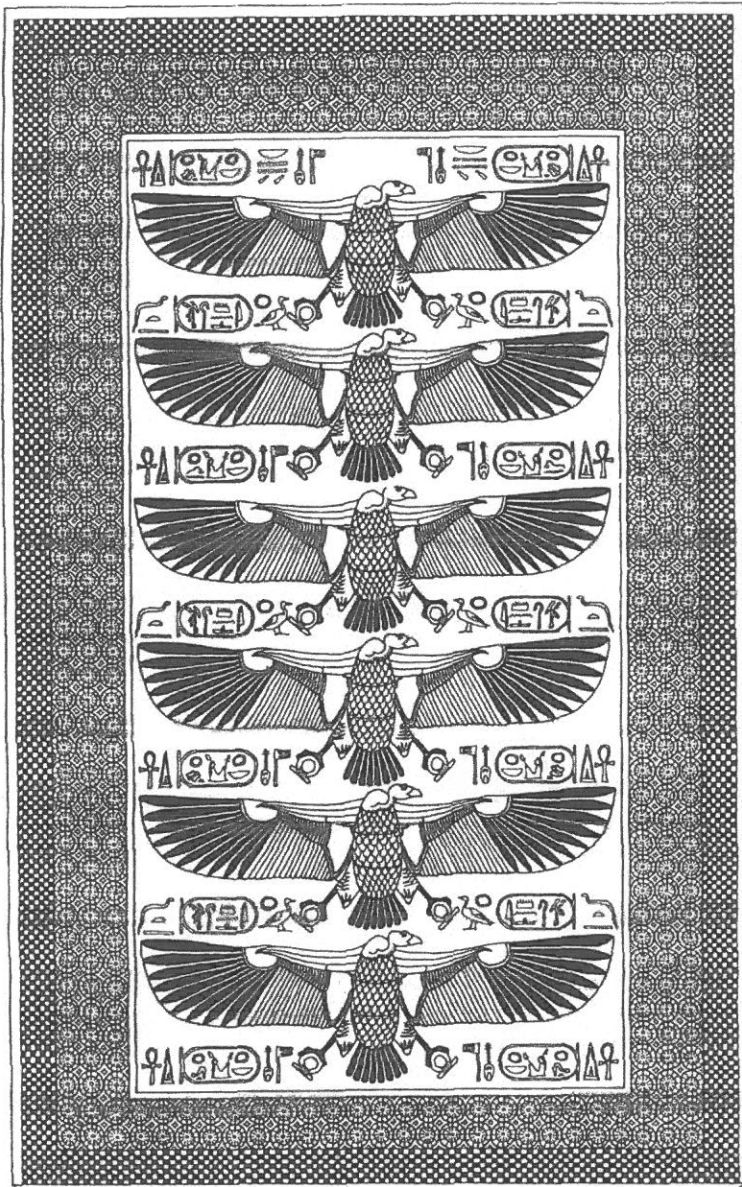


図4 王の寢室天
井画復元図

なお重要な意味があることを示しており、注意すべきである。事実、この部屋における彩画片の出土場所と、当初彩画が描かれていた場所との間には密接な関わりがあり、左から右へと読むヒエログリフの文字列は基本的に部屋の西側から出土し、右から左に読むべき文字列は反対に東側から見つかった。両翼を上げた姿であらわされたネクベト像⁽¹²⁾の右翼端、左翼端と各々の出土場所に関しても同様である。

この部屋の南側の床は一段高くなるとともに部屋の幅もいくらか狭められており、天井面の彩画もこれと対応して若干の違いが認められる。以下、便宜上、一段高くなっている南側の場所を上段、また北側の場所を下段と呼称することとする。上段は寝台が置かれていた場所である。上段の幅が下段よりも小さくなるために、ヒエログリフの文字列もネクベト像も下段のもの⁽¹³⁾と比べ、やや縮小されて描かれており、下段の天井画よりも上段の天井画の方が入念に描かれている。

(2) 文字列、及びネクベト像

文字列とネクベト像は交互に並べられて描かれたモチーフであり、密接な関連を持つのでここでは一括して扱う。ネクベト像の数については、出土した文字列の数と、ネクベト像の推定される高さ、そしてこの部屋の長さとを勘案することによって確定することができた。上下エジプト王名を含む文字列のうち、左から右に読むものは少なくとも5つ描かれていたことが知られる(図5)。そのうちの1つ(図5, A')は大きさが他のものよりも小さく、文字の書き方も丁寧である。加えてこの彩画片は上段から出土しており、以上の事実から、それが上段に属するものである点は明らかである。上下エジプト王名が描かれたカルトウーシュの前には *ntr nfr*「良き神」、またカルトウーシュの後ろには *di 'nh*「生命が与えられん」の修飾語が付されていた。上段の上下エジプト王名、また下段の最北部に位置していた上下エジプト王名(図2, 左上)には、さらに *nb t3wy*「二国の主」という語が加えられている。カルトウーシュの中の王名に付された修飾語には *iw't R'*, *stp n R'*, *tit R'* の3種類が見られ、変化をつけようとした工夫がうかがわれる点は興味深い。出土場所を勘案した結果、下段の天井では *iw't R'* を持つカルトウーシュが1番目と5番目に、*stp n R'* が3番目に、また *tit R'* が7番目に位置していたらしいことが判明した。それぞれの間である2, 4, 6番目には同一のサア・ラー名が書かれていたと考えられる。サア・ラー名のカルトウーシュの前には *s3 R'*「ラー神の息子」、カルトウーシュの後ろには *dt*「永遠に」が付される。

図2左上の彩画片は右から左に読む上下エジプト王名のカルトウーシュの前に置かれた修飾語を示すが、ここには左から右に書かれる *s3 R'* という文字が、赤い下書きで書かれていた痕跡が残存する(図2左上, 点線で示す)。同じような痕跡は図2右上の *nfr* の彩画片でも見られ、左から右に読む *nb t3wy* の下書きと見られる赤線が観察された。計

	左読み	右読み
A		
A'		
B		
B'		

図5 出土聖刻文字片。A, 下段の上下エジプト王名。A', 上段の上下エジプト王名。B, 下段のサア・ラー名。B', 上段のサア・ラー名。

画当初, 天井最北部の文字列に関しては, 左から右に読む上下エジプト王名に続き, サア・ラー名が書かれる予定であったことが示唆される。また下段の他の上下エジプト王名のカルトウーシュの直前にも nb t3wy を書こうと一時期, 計画されていたらしい。

さて下段の天井画における連続したネクベト像は北に向かって, つまり部屋の入口から見るならば部屋の奥から戸口に向かって描かれていた点が文字やネクベトの彩画片の出土状況から判明した。特に図2左上の彩画片はこの部屋の北端から出土したものであり, この断片の上方にはローゼット文との境を示す黒線と白帯の一部がうかがわれるから, ネクベトの向きが明瞭に知られる。しかしながらこの向きは, 列柱大ホール(H室)身廊部の天井に同じく描かれていた連続するネクベト像と逆である。列柱大ホールではネクベト像の向きが南に, つまり部屋の奥へと向くように描かれている。にも関わらず, 王の寝室のネクベトも列柱大ホールのネクベトも, 天井に描かれている状態においてはともに西に首を曲げている点が興味深い。すなわち列柱大ホールのネクベトは彩画片に向かって左向きにネクベトは首を曲げているのであるが, 王の寝室では逆に, 右を向いているのである。基本的に部屋の奥に向かって並べられながらも, 最奥の部屋において

ネクベトの向きが逆転する現象は、時代が下るものの、デンデラのハトホル神殿などでも見られ、古代エジプト建築の軸性を考察する上で重要である。

サァ・ラー名についてはカルトゥーシュがいずれも白漆喰によって消されていた。これはアメンヘテプ3世の次代の王であるアクエンアテンが、アメンヘテプ3世のサァ・ラー名に含まれている 'Imn「アメン神」の文字を抹消するためにおこなったものと考えられる。このサァ・ラー名を含む文字列の中には、やはり文字が小さく、修飾語 mri.f が付加されているものが認められ、これは上段の天井にあったものと判断されよう。上段の南北方向の長さから考えて、ここには2羽のネクベト像しか入る余地がない。⁽¹⁴⁾断片からは、上段の天井の先頭に位置するネクベトの上には文字がなかったことが知られ、また別の彩画片から、1羽目のネクベトの下に上下エジプト王名を記した文字列が、2羽目のネクベトの下にはサァ・ラー名を含む文字列が記されていたことが確認される。

下段の天井におけるネクベトの向きはこうして明らかになったものの、決定的な証拠がないために上段のネクベトが下段のネクベトと同じ方向である北を向いていたか、あるいは逆に南を向いていたかを知ることは困難である。判断材料となったであろうネクベトの首の向きについても、上段に属すると思われるものは出土しなかったために確かめることができない。しかしこの最も奥まった部分において2羽のネクベトの向きが再度反転するとは考えにくい。上述したデンデラの例、あるいはエドフのナオス天井に見られるネクベトが外側に向かっている例、さらにはツタンカーメンの棺を納めた入れ子状の4つの厨子⁽¹⁵⁾における天井画のネクベト像の向きの傾向などを考え合わせるならば、下段と同じく北側向きであったと見なすのが妥当であるように思われ、ここでは下段と同じ方向を向くように復元をおこなっている。

文字列の上下には補助線が引かれていたが、上下段で色彩が異なり、下段では筆による赤線、上段では白墨のようなもので引かれたと思われる白線⁽¹⁶⁾であった。これらは泥 plaster の上に塗られた白に、黄色の透明色を塗って仕上げられた黄色地の上に引かれている。だがこれだけ広い面積の天井にネクベトや文字列、またそれらを囲む幾何学文様を描くには、泥 plaster に白色を塗る前に計画がなされて割付線があらかじめ引かれたと推定され、王の寝室の壁画や列柱大ホール天井画では、実際にこの割付線を観察することができる。王の寝室の壁画では 'nh と s3 が交互に並べられているが、'nh の横腕⁽¹⁷⁾の位置と文字の下端に沿って白い線が残存する。この線は泥 plaster の上に墨糸を弾くことによって引かれたものであり、白線の周囲には糸を弾いたために飛んだ白色の細かな飛沫がうかがわれる。王の寝室の天井画片は色層の残存状態が良好であるために、色層の下に引かれた線は確認できなかったが、損傷の激しい列柱大ホールのネクベトの断片では、彩画が剥落して泥 plaster が露になった箇所、しばしばこの割付線

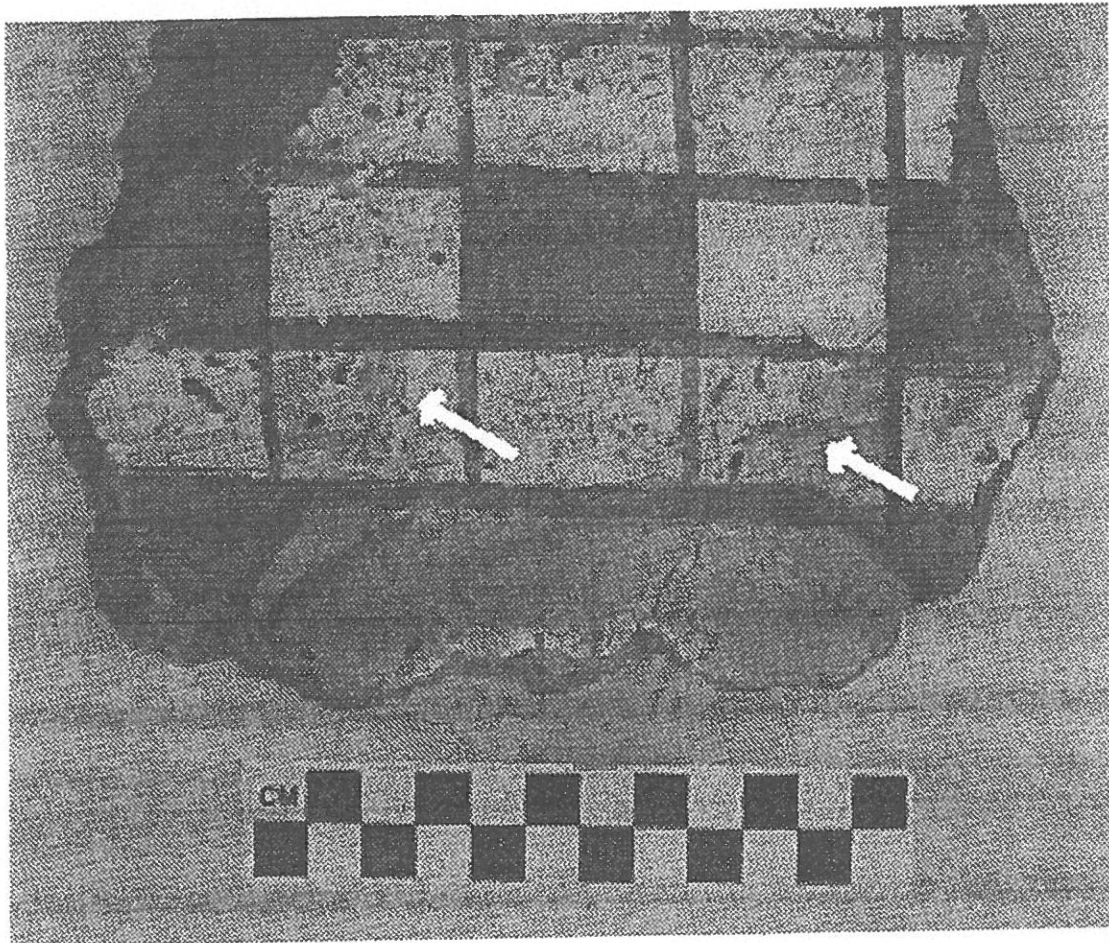


図6 チェッカー文とローゼット文。チェッカー文にはひとつおきに黒点が印されている。

を確認することができた。

(3) 幾何学文様

ローゼット文については中心の小円に塗られた色彩により、上段に描かれていたものと下段のものとの区別をつけることができ、下段のものは赤色に、また上段のものは緑色に塗られていた。緑色が塗られる場所は全体として限定されており、塗布面積が最も少ない色彩である。花びらの描き方には12弁を丁寧に描いたものが散見されるが、多くは省略されている。隅部では歪んだローゼット文がうかがわれ、ローゼットひとつひとつの割付まではおこなわれなかったことが示唆される。

彩色が剥落したチェッカー文の場合、最も内側に並んだ列の色が塗られるべき柁目で、ひとつおきに黒点が打たれているさまが見られた(図6)。これは色を塗るべき柁目と、白地のまま残すべき柁目とを混同せぬように、彩色作業に先んじておこなわれた配慮と思えるが、結果的にはチェッカー文の隅部において塗り分けがしばしば整合しなかったさまが他の彩画片で観察される(例えば図7のチェッカー文の右側)。また白色下地の上

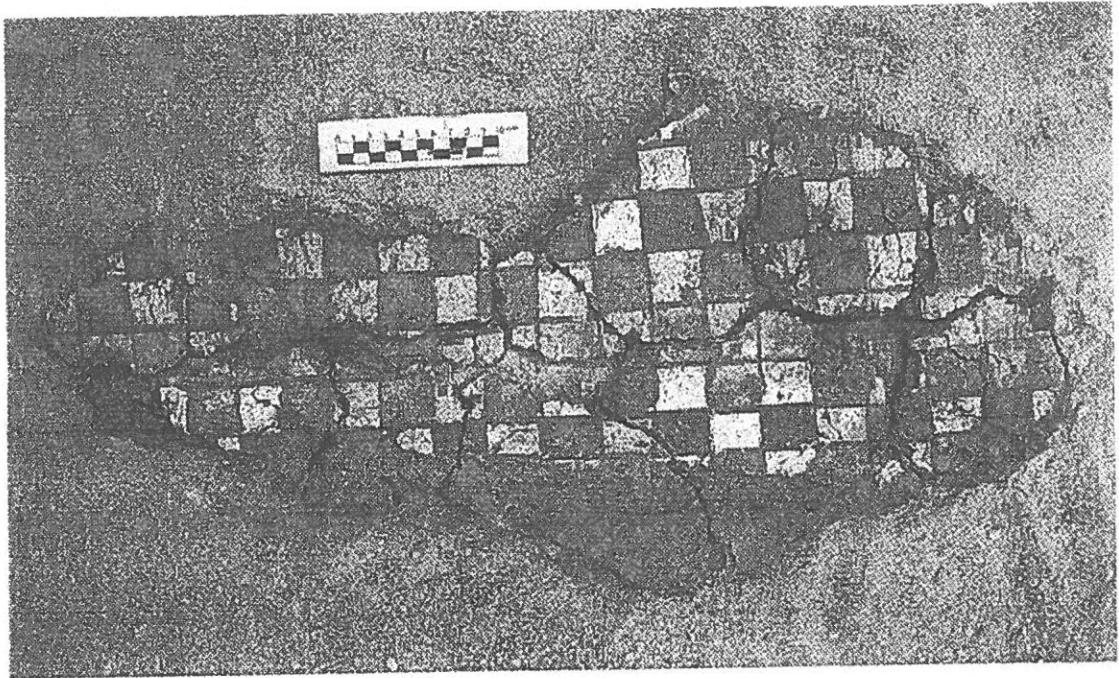


図7 チェッカー文とわずかに残存するローゼット文。反対側の、本来は黄帯があるべき場所には水平にごく浅い圧痕が残る。

に記された墨糸によるピンク色の割付線が、チェッカー文の長辺方向のみにうかがわれた。これと直交する短辺方向の区分線は、あらかじめ引かれる補助線なしに目分量で引かれたのであろう。

(4) 天井画の彩色順序

こうした観察を重ねることによって、天井画がどのような順序で仕上げられていったかをいくらか想定することが可能である。まず前述のような割付線が、墨糸を用いて泥プラスターの上に白色で記されたと考えられる。彩色がおこなわれる前に白色下地が塗られたのは、黄色の透明色を塗った部分、ネクベトの翼のうち翼端部と胴体に近い部分、胴体のうち赤く塗られる部分、首、ネクベトが爪で掴んだ文字 šn の部分、幾何学文様ではローゼット文のうち丸いローゼット部分、チェッカー文の全域である。残りの部分、すなわちネクベトの胴体の青く塗られた部分、翼の翼端部を除いた黒い部分、幾何学文様のうちローゼット同士の間隙、及び最外周部の黄色帯については白色の下地が塗られずに、直接泥プラスターの上に色が置かれている。この白色の下地は、その上に塗られる色彩の彩度を高める上で重要な役割を持ち、天井の全面に白色を施した方が作業としては効率的であったろうが、そのようにおこなわれなかったのは、強い隠蔽力があつて堅牢で輝きのある塗膜を形成するハントイトを成分としたこの白色顔料の希少性⁽¹⁸⁾に原因を求めることができ⁽¹⁹⁾るかもしれない。エジプトにおいてはハントイトの入手が困難であったと思われ、おそらくはこのことが白色下地の塗布面積を減じた理由であろうと考

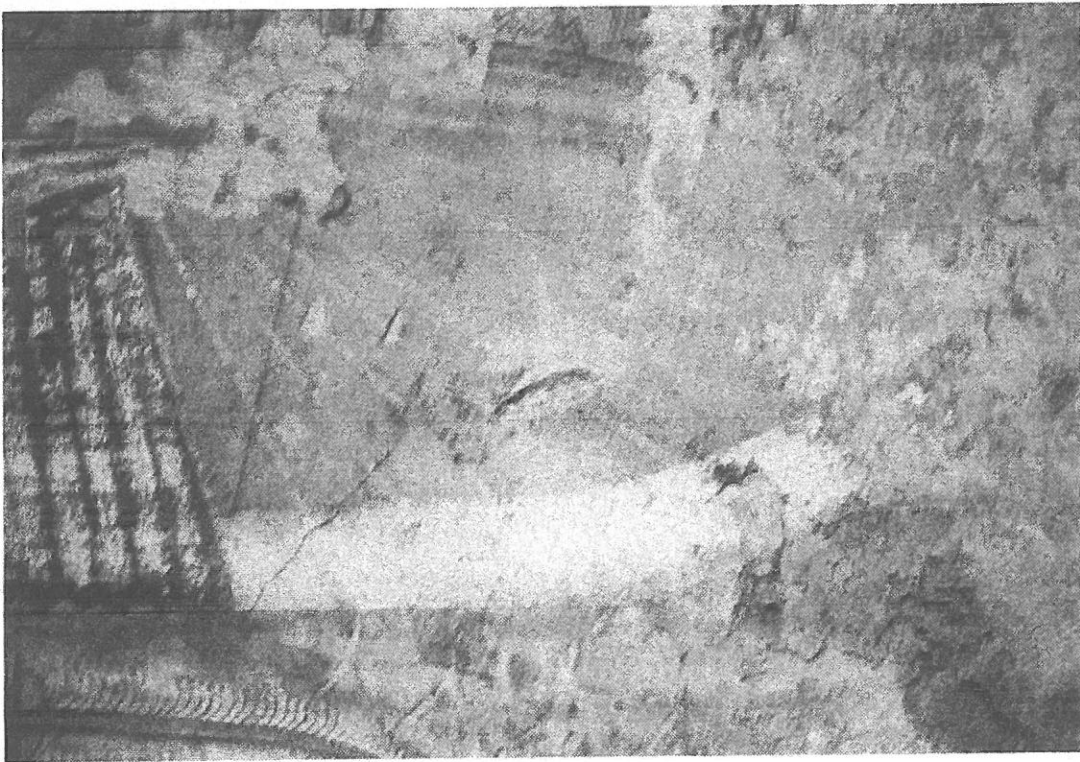


図8 王家の谷メルエンプタハ王墓 (KV8)、第1通廊天井の未完成のネクベト画像、右翼。

えられる。白色下地が施されなかったのは青や黒といった比較的隠蔽力が強く、また塗布面積が広い顔料の部分である点が注目される。

割付線はネクベトと文字列が描かれる黄色地の枠線の他、セティ2世の王墓の第1通廊の天井で見られるように、ネクベトの中心線と胴体の幅を記す線や、各々のネクベト⁽²⁰⁾の配置を決定する上端と下端の位置に記されたであろう。これをもとにネクベトのおおまかな輪郭が描かれ、白色下地が最初に塗布された。この上に赤線でネクベトの形がやや細かくスケッチされ、黒線や赤線による最後の輪郭の描き起こしがなされる前に、各色が塗られている。ただしチェッカー文においては升目が引かれた後に、赤、青、緑といった各色が塗られた。文字列についても同様に、水平に描くための補助線と各文字の下書きが赤線で記され、これをもとにして彩色が進められた。ネクベトの黒翼の部分では手早く仕上げるための工夫がうかがわれたが、これは新王国時代の王墓などでもしばしば見ることのできる描法である(図8)。すなわち白色を全面に施して、そこに黒翼を描き分けていくという方法をとらず、黒色に塗られる面積の比率が大きい黒翼の胴体に近い部位には下地に黒を、反対に白が塗られる面積が大きい翼端の部位には下地に白を帯状に広くべた塗りし、描画の効率化を図った形跡が認められる。

IV. 天井面終端部の様相

チェッカー文の外側には、黄褐色の色帯が描かれていた。天井画が壁面と出会って終端となるのはここであって、部屋の東側端部と西側端部に属する黄褐色の色帯の断片端部には例外なく平坦な面に押し当てられた時に形成されるような圧痕がうかがわれた(図2,左下)。天井面と端部に見られる平坦な部分とがなす角度はほぼ直角である。この平坦部は壁面との接合の様子を示す痕跡と見られ、天井が壁面と直交していたことが示唆される。しかし問題となるのは北側における天井画の終端部であり、ここでは天井面が直角に壁面と出会っていたことを示す彩画片が一切発見されず、代わりに天井が壁際で内側に湾曲していたことをあらわす彩画片が多数出土した。裏側にはアシの莖を束ねたものを下地材として用いていた痕跡が明瞭に残り(図2,右下)、この部屋における通常天井下地材の様相と大きく異なっている。

北側の天井部分が壁体近くにおいて何故湾曲しているのかについては不明であるが、この天井の形状は pr wr, すなわち上エジプトの伝統的な祠堂の屋根の形態を思い起こさせるものである。この祠堂の屋根は、緩い勾配を保ちながら上昇した後、湾曲しながら下方するという独特な形状を有する。もしこの仮想が正しければ、彩画片の裏面に残るアシの莖を束ねた圧痕は、北側の天井面と壁面とがなす鋭角となる部分に充填された下地材の存在を示すと考えられよう。

ただし、下段の天井が緩やかな勾配を有することを示す他の証拠を探ってみたものの、これを検知することはできなかった。例えば天井画における絵具の垂れがあった際、これらが北側から南側へと流れている傾向を掴むことができれば、天井のこの傾斜の存在を指摘できるはずである。しかし現在までのところ、明瞭な傾向を把握することができていない。もうひとつは実際の出土彩画片の接合を試みて、復元された天井の長さと言の寝室の長さを比較し、傾斜の有無を割り出す方法がある。天井に傾斜があった場合、その斜めの長さは必ずいくらか部屋の長さよりも大きくなるはずであり、彩画片の接合結果から天井が傾いていた証拠を探るという後者の試みからも1988年以降、長い時間をかけて作業がおこなわれてきた。しかしながら、ローゼット文の並んでいる個数が下段の南側において確定していないということが最大の難点となっており、未だに明快な回答が引き出せていない。下段の天井において、東側と西側にはローゼット文が3列並んでいたことが彩画片から明らかである。しかし残る南側と北側については、2列並んでいたことまでは確認できるものの、これらを東側と西側と同様に3列であると即断することができない。これは上段の天井において、東側と西側はローゼットが3列であるにも関わらず、北側は2列であることが彩画片から明瞭であるため、下段の南側と北側も2列であった可能性が指摘されうる。ローゼット文の直径は約15cmであり、傾斜が

わずかである場合、これによって生じる長さの伸びはローゼットひとつ分の大きさの違いの中に収まってしまい、下段の天井の南側と北側のローゼットの列が2つか3つなのかが先に決定されない限り、天井が水平であったかそれとも傾斜していたかの判断ができない。

仮に下段の天井が上エジプトの祠堂の屋根の形状を模していたとする時、この天井は北から南に向かって下る緩やかな勾配を持っていたことになるが、その南側端部がどのように上段の天井と接続していたかも課題となる。残念なことに、上段と下段との天井の境がどのようにになっていたかを直接指し示す遺物もまたきわめて乏しい。損傷の激しいコーナー小片が1点のみ、上段と下段の境近くの床上から発見されたが、おそらくは壁面隅部の断片と見られる。

唯一、貴重な資料であると思われるのが、下段天井の南側がどのように終わっていたかを示すチェッカー文の彩画片（図7）である。多数の小片を接合することによって復元されたこの断片はチェッカー文の隅角部を示し、裏側に残る天井下地材の方向と出土位置から、当初は下段の天井の南西の隅部に属していたことが知られる。特徴的なのはチェッカー文の外側にあるはずの黄褐色の色帯が見られず、代わりに彩画片のこの位置が直線状にごく浅く欠き込まれた圧痕を示しており、隅角部を有した何かに突き当たっていたことが仄めかされる。上段と下段の境から隅部を示す泥片がまったく出土しなかった事実は、先行調査隊が入念に隅部の彩画片を取り除けて別の位置に移動したか、あるいは元来、天井のこの部分には泥プラスターによって造られた隅部が存在しなかったことを示唆する。他方で下段南端の天井彩画片では、上記したように、隅角部を有した何かに突き当たって終わっていたことが暗示されており、これは上段の天井の北端部がやはり直線的に切れて平坦な圧痕で終わっている点と符合している。構造的な見地から言うならば、上段と下段の境の天井部分には梁があったと想定するのが自然であろう。

彩画片の全般的な出土状況から考えて、先行調査隊が隅部の泥片のみをすべて移動させた想定することには無理があり、本来、上段と下段の境には泥プラスターで造られた隅部は存在しなかったとみなすのが妥当である。しかし彩画片には平坦な面を持つものに突き当たって終わっていた痕跡が残存しているため、ここには四角く加工された木製の大梁が当初存在し、彩色はこの梁に直接なされていたと考察される。この大梁は再利用を目的として後に持ち去られたと考えるならば、上段と下段の境から隅部を示す泥片が出土しなかったことと矛盾しない。以上の見地をまとめるならば、下段の天井については現時点では上エジプトの祠堂の屋根の形状を模していた可能性が高く、上下段の境にのみ木の梁が天井面から突き出ていたと判断される。彩色はこの梁に直接おこなわれたと判断される。だがさらなる詳細な検討が必要であり、ここでは現段階におけるこ

の考察結果を指摘するにとどめ、王の寝室に求められた象徴的な意味の解明など、より包括的な視点からの考察は稿を改めて論じることとする。接合が進んで下段の天井の南側と北側のローゼットの列の数が確定されるならば、この問題についての回答が出されることが期待されよう。

上段の天井については、平らであった点が出土彩画片から明らかである。下段の天井のようにここが幾分の傾斜を持っていたとは想定しにくい。古代エジプト建築で、ニッチの天井をそのように傾ける例は知られていないからである。

V. 天井の構法

この部屋の天井の構法は特異であり、たぶん広大で平滑な彩画面を得る目的から、通常の構法を逆転することがなされたと思われる。王の寝室は南北に長く、ここに架け渡されていた大梁は部屋の短辺方向、すなわち東西方向に走っていたと考えるのが合理的である。天井を支えるために大梁をまず部屋の短辺方向に架け渡し、その上には大梁と直交させて天井下地材を敷き並べ、これを下から泥プラスターで塗り上げるというのが一般的な方法であるが、マルカタの王の寝室の場合には天井面から下に大梁が突出することを嫌って、上段と下段の境の大梁を除き、すべての梁を天井面よりも上の位置に持ち上げ、そこから天井下地材を吊るすことが試みられた。尋常ではないこの構法が詳しくはどのようなものであったかについて、タイトゥスの断片的な報告に基づき、すでに⁽²¹⁾スミスやアーノルド (D. Arnold) が復元をおこなっている (図9)。しかし今なお不明な点が多々残り、まず大梁の向きをスミス、アーノルドの復元図ともに部屋の長辺方向に想定している点は改められるべきであろうが、大梁の上がどのように仕上げられていたかに関しては、一切の資料を欠くために建築構法の知識をもとにして推定をおこなわなければならない。アーノルドの案は大梁を屋根の上に突出させる不自然な外観を避け、大梁の上にも陸屋根を付加した、言わば屋根を二重に葺いている案であるが、屋根の重量がかさむであろうこの案が妥当であるかどうか、さらに検討が必要であろう。

この部屋の天井において、下地材は同一方向に並べられていた事実が復元の過程で明らかとなり、このことは接合作業を大いに助けたが、これら天井下地材の一本一本は東西方向に並べられていたことが彩画片の裏痕より確認された。大梁もまた天井下地材と同じ部屋の短か手の方向に設置されていたはずであるから、大梁は直接天井下地材を支えたのではなく、まず大梁の下にこれと直交する小梁が細かい間隔で並べられ、これらが密に並べられた天井下地材を支持していたと考えられる。

天井下地材に塗られていた仕上塗の厚さは約4cmであったが、中にはこの厚みの中に縄が埋め込まれている泥片も見られた。つまりは敷き並べられた天井下地材から2cm

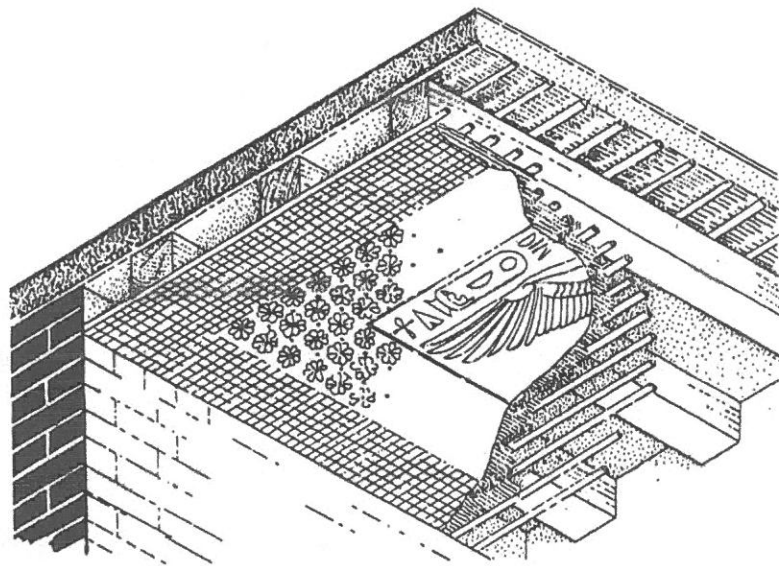
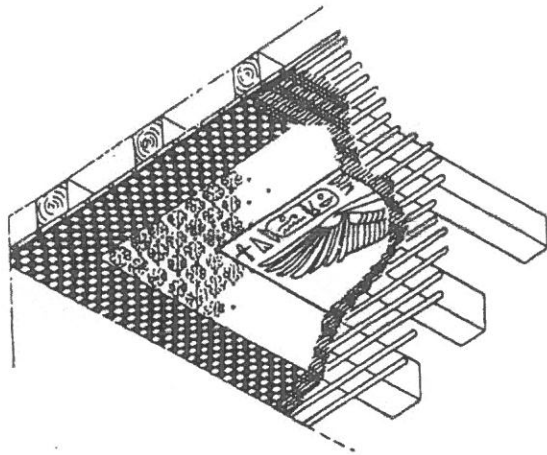
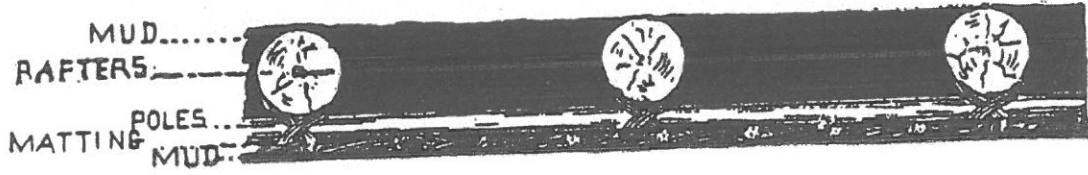


図9 王の寝室の天井構成図。上, Tytus による報告。中, Smith による復元図。下, Arnold による復元図。

ほど離れて垂れ下がる縄があったことを意味する。このような構法は古代エジプトの煉瓦建築ではまだ知られていないもの⁽²⁴⁾、日本の土蔵造りの壁体では厚い塗壁を保持するために下げ縄を下地材から垂らしてこれを壁の中に塗り込める方法が採られており、天井面の仕上塗の剝離を防止するための処置として、同じような構法が採用されていたと推定される。

VI. 結 語

以上、実際に出土した彩画片の接合作業の結果に基づいて復元考察を進めた結果、王の寝室の上段天井には水平の平天井が、また下段天井には上エジプトの祠堂の屋根を模した形状が想定された。こうした考察の過程を経て導かれた天井の復元で興味深く思われるのは、下段の天井の形状とともに、上段の天井が平らであり、その全面にわたって彩色がなされていたことが出土彩画片により明らかにされた点である。バダウィ (A. Badawy)⁽²⁵⁾はこの部屋の復元図を描いており、そこには上段の天井に通風口が採られているが、ここに開口を設けるならば王権を象徴するネクベトや王名を含んだ文字列を大きく損なうこととなり、彼が推定したように上段天井の中央部分に開口が設けられていたとはとうてい考えられない。通風口は別の場所にあったとみなすべきであろう。

どのような形状の通風口がどこにあったのか、模索する際には再び建築構法上の考察を必要とする。それはまたこの部屋の北側から集中して出土した多数の立体彩画片の詳細にわたる分析とも密接に関連し、この問題については別稿で論じることとしたい。

注

- (1) 中川武・西本真一編『マルカタ王宮の研究：マルカタ王宮址発掘調査1985-1988』中央公論美術出版、1993、図2-1-1・1；2-1-1・2。
- (2) M. G. Daressy, "Le Palais d'Aménophis III et le Birket Habou," *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 4 (1903), 165-170.
- (3) Robb de P. Tytus, *A Preliminary Report on the Re-excavation of the Palace of Amenhetep III*, New York, 1903.
- (4) H. E. Winlock, "The Work of the Egyptian Expedition," *Bulletin of the Metropolitan Museum of Art* 7 no. 10 (1912), 184-189; H. G. Evelyn-White, "The Egyptian Expedition 1914-15," *Bulletin of the Metropolitan Museum of Art* 7 no. 12 (1915), 253-256; A. Lansing, "Excavations at the Palace of Amenhotep III at Thebes," *Supplement to the Bulletin of the Metropolitan Museum of Art* (1918), 8-14.
- (5) B. J. Kemp and D. O'Connor, "An Ancient Nile Harbor: University Museum Excavations at the 'Birket Habu'," *International Journal of Nautical Archaeology*

- and Underwater Exploration* 3 (1974), 101-36.
- (6) Y. Watanabe and K. Seki, *The Architecture of "Kom el-Samak" at Malkata-South: A Study of Architectural Restoration*, Tokyo, 1986; 渡辺保忠『マルカタ南 I 魚の丘, 建築編』早稲田大学出版部, 1983.
- (7) 『マルカタ王宮の研究』, 上掲書。
- (8) Tytus, *op. cit.*, 13-14.
- (9) 『マルカタ王宮の研究』, 上掲書, 150-158.
- (10) W. C. Hayes, "Inscriptions from the Palace of Amenhotep III," *Journal of Near Eastern Studies* 10 (1951), 236; Fig. 39, 1.
- (11) W. Stevenson Smith, revised with additions by W. K. Simpson, *The Art and Architecture of Ancient Egypt*, New Heaven, 1998 (3rd ed.), 166; Fig. 291, E.
- (12) 『マルカタ王宮の研究』, 上掲書, 153, 図 2-2-7・10。
- (13) 『マルカタ王宮の研究』, 上掲書, 155, 158。
- (14) 『マルカタ王宮の研究』, 上掲書, 153, 図 2-2-7・10。
- (15) A. Piankoff, *Les chapelles de Tut-Ankh-Amon*, Le Caire, 1952.
- (16) 『マルカタ王宮の研究』, 上掲書, カラー図版 21, 22。
- (17) 『マルカタ王宮の研究』, 上掲書, カラー図版 18。
- (18) ハンタイトに関しては早稲田大学理工学部・宇田応之教授の御教示による。
- (19) L. Lee and S. Quirke, "Painting materials: White," in P. T. Nicholson and I. Shaw (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, 2000, 114-115.
- (20) J. Romer, *Ancient Lives: The Story of the Pharaohs' Tombmakers*, London, 1984, color plate 17.
- (21) Tytus, *op. cit.*, 13; Figs. 2-3.
- (22) Smith, *op. cit.*, 169; Fig. 291, D.
- (23) D. Arnold, *Lexikon der ägyptischen Baukunst*, Zürich, 1994, 59-61; Fig. B in page 61.
- (24) 天井の構法については B. J. Kemp, "Soil: Roofing," in P. T. Nicholson and I. Shaw (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, 2000, 93-96 を参照。
- (26) A. Badawy, *A History of Egyptian Architecture III; The Empire*. Berkeley and Los Angeles, 1968, 50, Fig. 27.